

志津川と京都に虹をかけよう

京都生協「海の虹プロジェクト」



京都の方(黄色いシャツ)からお土産を手渡される参加者。地元の人と話す機会が多かった。

京都生協では、震災後7回、宮城県南三陸町志津川に継続したバスボランティア活動を行ってきました。そこでできた、南三陸町の人とのつながりは、回を重ねるごとに強くなっていきました。

そんな中、京都生協は、8月17～21日の日程で、いつもボランティアに行っている、南三陸町子どもたちを京都に招くことにしました。募集にあたっては、みやぎ生協ボランティアセンターの須藤敏子さんや、宮城県漁協の佐々木憲雄さん、登米市の仮設住宅に住む松岡良奈さんなど、宮城の多くの人々が協力しました。宮城の地元FM局も何度も告知してくれました。京都でも、生協職員・組合員をはじめ、地元のさまざまな組織の総勢百数十人が運営に協力しました。

招待された26人の中学生は、自然の中で遊んだり、沢登りや地域の人との交流を楽しみました。過疎化が進む

村で、村を守るために奮闘する住民と話した参加者の一人は、「自分たちの学校も生徒が減って大変。町の復興のために自分も何かしたい」と思いを語っていました。



沢登りを楽しむ参加者たち。子どもたちの歓声が響く。

種蒔きした秘伝豆を自分たちの手で収穫

食のみやぎ復興ネットワーク「村田の秘伝豆プロジェクト」※

関連記事 本誌19号にて、種蒔きの様子を紹介しています。

※食のみやぎ復興ネットワークが進めるプロジェクトのひとつ。「地域農業の活性化」、「休耕圃場の復活」、「後継者が安心して農業に取り組めるための経済的支援」を目指し、取り組みが進んでいる。



収穫風景。秘伝豆は9月20日より、みやぎ生協店頭でも、販売が開始されました。

9月15日、宮城県柴田郡射野町の高橋寛さんの畑で、秘伝豆の収穫がありました。青々と茂った秘伝豆は、「村田の秘伝豆プロジェクト」を進めているみやぎ生協、卸会社、食品メーカーが、5月19日に一緒に手で蒔いたもの。

途中、生産者が、除草や、栄養が行き届くようにするための芯止め作業を行ない、無事に成長しました。

畑には畝ごとに種蒔きに参加した団体の名前が目印でついています。「実もふっくらだ」「枝豆ってこんな風になるんだ」。自分たちで蒔いた種の成長に顔がほころびます。刈り方を教える高橋保さんも、「普段は機械で刈るんだけれど、今日はぜひ皆さんの手で刈ってもらおうと思って、ちょうどいい具合に実るように育てたんだ」とうれしそうです。

収穫後は全員で豆もぎをしました。もいだ枝豆は生産者のご家族の皆さん

が、茹で豆とずんだ餅に調理。味の濃い秘伝豆の美味しさに舌鼓を打ちながら、収穫を祝いました。

秘伝豆は10月12日頃まで収穫できます。村田町の秘伝豆の旬はまさにこれからです。



秘伝豆の豆もぎする参加者。